

# Triumph onedollar ～勝利へ の放浪者～

リューヤ



はそういうことだ。

手術の説明をろくに聞かず軽い覚悟で手術に臨んだジンは今もなお、扉の向こうで絶叫しながら手術を受け続けている。成功を見届けるために近くのベンチに腰かけている6人はジンのそんな悲鳴を聞きながら無事を祈りつつ、若干恐怖しながら待機していた。

あのジンからは考えられないような悲鳴に両耳を塞ぎながら震えるアゲートは、自分の事でもないのになぜか発狂してしまいそんな感覚に陥っている。

「コワイサ・・・コワイサ・・・ゴメンナサイ・・・ゴメンナサイ・・・」

「なんで君が怖がるんだいバンダナ君、落ち着いたまえ」

「アタシアゲートに同感するよ・・・こうやってポーっとしながらひたすらジンの悲鳴聞いて  
と、何か頭がおかしくなりそうで嫌だ」

「・・・かれこれ3時間か。ジンの体力がいつまで保つか、だな」

「痛みで死んじゃたりするかネ？」

「猫眼さん、怖いこと言わないでください・・・鳥肌立ちそうです」

それぞれ思うところはバラバラだが、一応ジンの手術の成功を祈りながら待ち続けた。

あれからさらに一時間が過ぎたところで、手術室のランプが消えた。それは全ての作業が終了した  
合図であり、それを見た途端6人には緊張感が走りその場で立ち上がった。

間もなくして扉が開かれ、白衣を赤く染めた担当医がゆっくりと歩いてきた。疲労困憊の様子は  
隠しきれない様で、どこか足下がおぼつかない。

神妙な面持ちで手術の結果を気にしている6人へマスクを外して視線を向けると・・・医者は歯  
を剥き出しにして微笑みながら親指をぐっと突き出した。

手術は無事、成功した。

緊張の糸が切れた一行は心から安堵するように胸をなでおろし、肺の中に溜まっていた空気をす  
べて吐き出した。程無くしてストレッチャーに横たわったジンが手術室から運び出され、いった  
いどのような風体に生まれ変わったのか野次馬根性丸出しにして覗き込んだ。

ジンの左肩と右膝は分厚い銀色の板金で覆われ、それぞれ中央には義肢を接続するための穴・・・  
コネクターと神経回路を繋ぐための配線コードが数本伸びていた。ジン本人はと言えば、手術  
の痛みから解放されたせいなのかぐっすり眠っている。その寝顔には先ほどまで聞こえていた苦  
痛の表情はどこにもない。

「麻酔の効果が切れて身が覚めるのは明日になるでしょう。それまで安静にさせてやってくだ  
さい」

医者はそう言い残すとジンを運び出し、別室のベッドに寝かしてすべての工程が終了した。そし  
て長時間の手術を終え疲労の溜まった医者達もまた同時に、泥のように眠りこけてしまった。

何はともあれ手術は成功、あとは義肢の完成を待つのみだった。

「ようしこっちはいいぞ男女君」

「こっちもOK。覚悟はいいなジン？かなり痛いらしいからな」

「オウ・・・さっさとしてくれ」

「「せ～の・・・せっせの、せ！！」」

アゲートとコルトがジンの体を押さえつけながら、ドクターとジェットが手足の神経回線を繋いだ瞬間ジンの体が一瞬跳ね上がった。その衝撃はあまりにも激痛だったのか、ジンは啞えていたタバコのフィルターを一気に噛み千切るほど歯を食いしばり痛みを耐えた。

ジンお手術が成功してから一週間後、肉体が完全に落ち着いたジンの体にととうとう完成した義肢がついに接続される時が来た。機械と脳と直接リンクさせるために必要な神経接続には手術の時にも負けないほどの痛みを伴うため、手足の接続は同時に行った方がいいと勧められてたつた今それが完了したところなのだが・・・ジンの表情を見て分かる通りその痛みは絶大だったらしい。

。

「~~~~~！！！！（声にできない叫び）」

「痛いかいメガネ君？」

「・・・痛くねえ・・・っ！！」

脂汗をにじませながら全身が震え、おまけに声まで裏返っていては誰もその衝撃が痛くないなんて信じてなどくれない。ドクターはハイハイと面倒くさそうに返事をすると、接続部分に水や埃が入らない様に専用の金属カバーを取り付けた。同様にジェットもドクターの指示に従って足のカバーも付ければ・・・これで全ての作業が完了した。左腕と右足を失ったジンの体に、新しい機械の手足が接続されたのだ。

「はい、お疲れさんっと。さっそく立ってみなメガネ君」

疲れが出ているのか肩をほぐしながら促すドクターに言われるまま、ジンはさっそくベッドの上から自力で立ち上がることにした。両足でゆっくり床を踏みしめ、両腕を使って体を支え、手すりに着いた腕をバネのように伸ばして体を持ち上げると・・・ジンはついに、およそ10日ぶりに自分の力で立ち上がることに成功したのだった。立ち上がった瞬間、周囲から歓声が上がりアゲートとコルトが拍手をしてくれた。

「スッゲーさジン、その鋼鉄の腕とかめっちゃかっこいいさ！」

「バカ言ってるじゃねえよ。でも意外と重いような・・・ってあらららら！！？」

一歩歩き出そうとした直後、ジンは突然バランスを崩して顔面から床に向かって卒倒してしまった。いったい何が起こったのか訳が分からない一行はただ仰天し、ジンが自力で仰向けになるまで思考がストップして何もできなくなった。まだ包帯で包まれた肉体が一斉に悲鳴を上げ、凄まじい激痛がジンを襲う。

「痛ててて・・・何か、調子が悪い・・・歩けねえ」

「ドクター、ジンに何が何が起きたか？」

「たった今装着したばかりの手足でいきなり歩こうとしたからだろうね。改めて言わせてもらうがその義肢は元あったキミの手足とは全く違うものだ。今後歩行やらなんやら、日常生活に支障の出ない行動を可能にするためにはリハビリが必要なのは言うまでもない当たり前のことだよ。生まれたばかりの赤ん坊がいきなりアスリート張りに走れるわけないだろ？」

ちょっと考えてみれば当たり前すぎる発言にジンはグウの音も出なくなり、一瞬そっぽ向いてしまった。アゲートの肩を借りて床の上で仕方なく胡坐をかくと、せめて動作を確認するように腕を回したり手を握ったりしてみた。神経が機械とつながっているというのは本当であり、ジンの意思に従って腕の義肢は思うとおりに動いてくれた。以前ほどの握力はないがしっかりと拳を握ることができ、さらに『拳を握っている』と言う感触が手の平全体から伝わってくるのを確かに感じる。まさに欲しかった最高の逸品に、ジンは感動しわずかにほほ笑んだ。

後は・・・まともに活動できるようになるまでリハビリの毎日になるだろう。

「ドクター、俺は今まで通り動けるようになるまでどんくらいかかりそうだ？最短コースで、だ」

「そうさねえ・・・キミの傷の回復と並行して歩行訓練、肉体の訓練、剣の特訓にあれやらこれやら諸々込みで・・・最速で行っても軽く2年から2年半ってところだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・2年んんんんん！！！！？」

想像以上のリハビリ期間の長さ一同が驚かされた。その中で特に驚いているジン本人は突然その場で膝立ちになると腕を伸ばし、ドクターの襟をつかんで思いっきり引き寄せた。

「ザケンじゃねえよ、そんな長い時間ちんたらやってられっか！バカ言ってねえで最短ルート教えやがれってんだよ！！」

「落ち着いたまえメガネ君、小生とて医者だ。君が死なない程度に無茶をした訓練を想定してリハビリのメニューを小生なりに組み、その期間を総合した結果が2年半だ。これが正真正銘キミの求める最短ルートだよ？」

「つったってドクター、もっと早く終わらせることはできないさ？いくらジンの為でも2年もここでずっと足止めっていうのもちょっと・・・」

「無茶を言うな・・・これでも小生だって無茶を言っているくらいなんだよバンダナ君？」

「・・・・・・・・ンだよ、畜生っ！」

自分の都合だけの為にこの場に2年も強制滞在・・・・・・・・これでは自分が完全に邪魔ものでしなくなってしまうのではないだろうか。荷物になりたくないから新しい手足を求め、手に入れたつもりでいたのにこれでは全く解決したことにはならない。

結局のところ・・・事態は振り出しに戻ったのにも等しく、ジンは悔しそうにドクターから手を離すと、左手の拳で床を力の限り殴った。金属の拳は石の床を簡単に抉り、ジンの拳には石を殴ったことで生まれた痛みが左手全体に響いた。

情けない・・・・・・・・どう頑張ったところで、自分は邪魔にしかねれないのだと悟ると、ジンは肩を落としそれっきり何も言わなくなってしまった。

「・・・・・・・・くくくくく」

「・・・ジェット？」

「ア～ッハッハッハッハッハッハッハッハッハ！！」

突然何を思ったのか、意気消沈するジンを見下しながらジェットが仁王立ちで腕を組みながら高笑いを始めた。何がなんだかさっぱり理解できず皆両目を丸くしてジェットの高笑いを聞き続けるのだった。

「なんだよジン、情けない顔しやがってよ～。それでも男かよ？」

「そんな気分じゃねえんだよ・・・殺すぞ」

「んなこと言っているのかな～？今の、このアタシによ～？」

ジェットは明らかに何かを隠している、それは明らかに態度からうかがえ全員に伝わった。それ以上に態度が気に入らないジンは包帯に巻かれていない右目でジェットをギロリと睨みつけた。今のジンにとってジェットのこの態度には殺意すら湧いてくる。

「何が言いてえんだ糞アマ・・・ケンカ売りにえなら買ってやるからさっさと言えコラ」

「いい物持ってんだよアタシは、今のお前にはおあつらえ向きの、最高のアイテムをよ～」

そういうとジェットは自分の練るベッドまで歩いてゆくと、枕の中に手を突っ込んで何かを探し出した。

10秒ほどかけてそれを見つけ出すと、新しいおもちゃを自慢する子供のようにそれを突き出して皆に見せつけた。

その正体は一本の大きなフラスコだった。でもただのフラスコなどではない、中に模型が詰め込まれている。フラスコから毀れないように注がれた青い水の上には小島が浮かんでいる。小島の中には小さな屋敷があり、ビーチにジャングル、切り立った崖にそびえるような山、不思議なことに雲のような綿に太陽のような光源まで空中に浮かんでいる。それはまるでボトルシップのような繊細で完璧に完成された小さいリゾートのような模型だった。

「・・・・・・・・おちよくてんのか？」

「ふっふっふ、こいつはアタシが暇な時間を利用して作ったマジックアイテム『バカルディ』だ（ダミ声）」

ジェットは手に持つそのバカルディとやらを高く掲げるのだが、癒えていない傷が痛み腕を伸ばした瞬間フラスコを床に落としてしまった。割れて中身が飛び散ってしまうかと心配したが、フラスコは堅い床の上を一度だけ跳ね返りヒビ一つはいる事無く床を転がりコルトに拾われた。落としてしまったにも拘らずフラスコの中身は一切乱れる事無く、逆さまに持ってもクルクル回しても固定されたように微動だにしない。

「へー、キレイですねえ。これってなんなんですか？」

「いててて・・・・・・・・おう！説明するより何とやらだ！」

言うや否やジェットは右手でフラスコに触れると、左手でパチンツと指を鳴らした。聞こえないような小声でブツブツと何かつぶやいた途端、フラスコが突如発光した。不自然な輝きの正体を理解するより早く、室内にいたすべての連中が思わず光をさえぎるため両眼を閉じた。

目を開けると、そこは雪ぐn・・・・・・・・じゃなくて

唯一見えるジンの右目が徐々に光に慣れ、ゆっくり瞼を持ち上げた直後・・・・・・・・言葉を見失った。自分は確かさっきまで病室の中に居たはずなのに、今日の前に広がっている景色は間違いなくあの消毒液臭い病室などではない。

目の前一杯に広がる謎の海、見上げれば広がる青い空と輝く太陽、振り返ればなぜかそこにある謎の二階建てコテージ、そしてどこまでも広がる白い砂浜とうっそうと生い茂る謎のジャングル、そしてやたらと高そうな山。

一体ここはどこなのか？ジンが現状を飲み込めずポカンとしている間にほかの連中も自分が置かれている状況に気づきキョロキョロと周囲を見渡している。

「何ここ！？どこここ！？オレっち達なんでこんなところにいるさ！？」

「すごいですね、まるでリゾートのような美しい砂浜に海ですよ！！」

「ん、よく分からんが修行にちょうど良さそうな山があるな」

「ビーチニャー！！ドクター、一緒に泳ぐヨー！」

「キシシシ、傷が治ったあとでね」

「あ～はっはっはっはっはっは！！どうだテメエら、これがアタシの実力よ！！」

「何でもいいがさっさと説明しろ、ここあどこだ？」

周囲の光景にテンションを上げている数名をほっといて、淡々とジンは話を進めるように催促した。

曰く、ここはジェットが作り出した仮想現実空間・・・ここはさっきジェットが取り出したあのフラスコの中の世界だという。その説明だけでは何のことだか何も理解できなかったのもう少し詳しく説明しよう。

この空間はあのフラスコ・・・『バカルディ』というジェットお手製のマジックアイテムを使用して発動したいわゆる非現実型魔法空間。ジェットがまだ魔術の勉強をし始めた時代に長いこと愛用し続けてきた空間だとか。この世界で流れている時間は実際に流れる時間よりも圧倒的に長く、現実世界での一日がこの空間内では一ヶ月流れることになる。

何が言いたいのか？ここで生活を送っていれば一日分の生活が一ヶ月生活することができるようになる。イコール、一日分の修業がここでは一ヶ月分の修業が可能になる。一日で一ヶ月分の勉強ができるようになる。そして単純計算するに、全治二年かかると診断された大ケガも、ここでリハビリをすればたったの24日で完治することができるというわけなのだ。

これはジェットが一行に送った最高のリハビリステーションである。ここにいれば完治するのに時間がかかる全員の傷も数日で完治し、鈍った体をここで一から鍛え直すことが可能になり、ジンに至っては義肢の訓練にももってこいと言うわけである。

「ま、つまりはそういうことよ！」

「なるほど、こいつはいいじゃないか男女君。我々に必要な年単位の膨大な時間がここにいれば1ヶ月もいらないうことか」

「半月もあれば俺の腕も治る。余った時間は鍛錬に回して1から修行のやり直しができるな」

「兄貴、普通骨折は半月で治らないと思うさ・・・あれ、オレっちの気のせい？」

「つまりここにいれば私はドクターと遊び放だ」

「猫眼、貴様は背中の中の火傷が治ったら俺と鍛錬だ。元はと言えば貴様の不注意から生まれた事件だということを忘れるな。この俺が直々に面倒を見尽くしてやるから覚悟しろ！！」

「ニャアアアアアアアアアア！！怖いヨオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

「よかったですねジンさん、ボクも頑張ってお手伝いします。一緒に頑張って現場復帰できるようになりましょう！」

「がっはっはっはっは！！もっと褒め称えやがれ愚民ども、頭が高いわ！！」

はしゃぐアゲート、高笑いするジェット、脅える猫眼、擁護するドクター、気力溢れる虎眼、微笑むコルト

ジンはこのメンツを今一度見直すと、今更かもしれないがなんだか胸がスツとしてきた。自然と肩の力が抜け、ついさっきまで暗く落ち込んでいた自分を忘れて、自分でも訳が分からないくらい笑いたくなってきた。

そうか・・・これが自分にとって一番の「普通な生活」なのかと、改めて認識した。こいつらといて、こいつらと笑って、こいつらと飯食って、こいつらと喋って・・・こいつらとこうして顔つき合わせているのがここまでホッとするとは思わなかった。

なんだか自分が頭を抱えていたことがバカみたいに思えてきた・・・だからジンは、笑った。

「・・・クククク・・・ダッハッハッハッハッハッハッハッハッハ！！」

「ジン、どうしたさ？」

「何でもねえよドアホ、ちょっとやる気でてきただけだ」

腹の底から出てくる感情を出し尽くすと、ジンは義手で頭に巻いていた包帯を千切り落とした。これから先、自分の為の修練を行うには片目だけでは都合が悪い。両目が見えなければ意味がないのだ。傷はまだ痛むが、動けさえすれば何の問題も無い。痛ければ気合で我慢する。それで十分だ

「さてと、準備も整ったんだ。さっそく今から訓練と洒落込もうや」

「今からかい？少し体を休めてからでもいいのではないかいメガネ君？」

「時間は手に入ったんだジン、焦る必要はない。歩くようなスピードでいいのだぞ」

「関係ねえやな。常識だなんてどうでもいい、オレはオレのやりたいようにやってやらあ。常識にツッパって生きてこそ、男ってもんだろが」

やる気は十分、時間も余裕、ここで動かなければ気が済まない。ジンは今一度自分の意志で決めた、「今すぐ開始する」と。

まずは歩くことができるようにならなければ意味がない、ジンは慣れない身体を今一度駆使して立ち上がると、そばにいたコルトの肩を借りてようやく直立できた。

と同時に、全員がジんに注目しだした。全員何も言うことなく、ジンの体のある1点を集中して注目している。それは顔だった。

「あんだよテメエら、オレの顔がどうかしたか？」

「いやそうじゃなくテ・・・」

「ジン・・・お前その目、どうしたんだ？」

「・・・・・・・・目？」

何を言っているのか本人には何もわからない。目がどうしたのか、自分で両目を触って確認してみたが目立つような腫も傷もニキビも無い。こいつらは何を見てそんな反応をしているのか？その答えはドクターが差し出した鏡を覗くことで全て理解した。

ジンの瞳は生まれつき赤紫色である。ちなみにこれは今亡き母親からの遺伝であり親父はダークブルーである。それなのに今のジンの左目はどうだろうか。鏡に映った自分の左目は、右目のようにワインのような赤紫ではなく透明感のある鮮やかなカシミヤグリーンに変色していた。

「ちょ！ま・・・何じゃこりゃ！？」

「そう言えばメガネ君、あの時戦う際左目から魔力が炎のように漏れ出していたね。その影響じゃないかい？」

「そんなことあり得るのかよ！？」

「わージン、新しいキャラ設定作ったさー！何だっけ、コットンアイ？」

「オッドアイの間違いだろ」

「瞳の色が変わることで見え方が変わったりするんでしょうか？景色が全体的に緑がかったり」

「紫外線でも見えるようになったんじゃないか貴様？」

「ニヤハハハハ！！ジン鳥みたいネ！」

「殺すぞテメエら揃いも揃って！！！」

「司令、新たな報告が届きました」

「はい、ありがとうございます。どれどれ・・・？」

ここはフェイファーとは違う全く別の軍隊組織、「アバカン」の本部、司令室。

国内での実力を順位付した場合フェイファーを加えて3番目の実力を持つ中堅クラスの軍隊である。この組織を統括しているこの男の名は「スティンガー」、ヒョロヒョロとした体と細い顎に狐目の上に丸いサングラスがトレードマークのアバカンの若き指令である。前総司令官より3年前この軍の権限を受け継いだばかりで御年わずか35歳。

彼の元にフェイファーに潜らせていた諜報部員からの報告書が渡され、さっそくその文面に目を通すのだが、彼からすればこれが本当だとしたら非常に傑作で仕方がない。

「本部のアーウェンでは三日間のどんちゃん騒ぎののち武装を放棄、23支部ではサイボーグ技術の完全破棄と実験素体の解放、14支部に至っては研究中の侵略用有毒気体兵器を焼却処分ときたもんですか。もったいないことをしてくれますねえ、捨てるなら全部貰い受けたいところなのに」

「有毒ガス兵器はフラスコ一杯分で小さな町を全滅させてしまう程の殺傷力を持つとの情報です。今となては後の祭りですが、間違いないのは恐るべき脅威が次々と無くなっていることです」

「その通り。そしてもう一つ・・・連中は自らの首を絞めていることに全く気が付いてないことですよ、クッククッククック。実に良いチャンスではないですか」

スティンガーは読み終えた報告書を手で放り捨てると、サングラスの位置を整えながら立ち上がった。

以前から計画していた作戦が彼の頭の中にあった、それを実行するならば今しかないだろう。そう考えるなりスティンガーはニヤリとほほ笑むと踵を返し、司令室から出て行こうとした。

「あの、司令・・・どちらへ？」

「いやね・・・私の好きなワインがそろそろいい感じに熟成したころでね、その試飲会のお誘いをしに」

「・・・ワイン？」

スティンガーは自らの部下にそう告げると、司令室から姿を消してしまった。

所変わりここはスティンガーの自室。安楽椅子に腰かけた彼の傍らにあるテーブルの上には一本の赤ワインと愛用のグラス、そして電話と一冊の電話帳がある。

「・・・さてと、お誘いを始めますか」

当時若い一兵士だった彼はフェイファー・ツェリザカがこの国に君臨した頃より考え続けていた・・・どうすればあの組織を倒すことができるのかを。

彼は長いこと待ち続けた。その間功績を上げ、地位を獲得し、部下も手に入れ、そしてついに一つの軍隊のトップに上り詰めることに成功した。

全てが計画通り、そのすべてが自らの野望であるフェイファー軍壊滅までの必要工程作業。あと一押しだけだ・・・全ての計画が成就するにはあと一押しが足りない。

そのひと押しを手に入れるための時間も確保した。必要な素材は全て手に入った。あとは連中がうまく誘いに乗ってくれるのを待つばかりである。

そのためには自らが出向かなくてはならない。上等なワインを一人で飲み干したい気持ちもあるのだが、いかんせんこのワインは味が強くて飲み干す前に舌が飽きてしまうかもしれない。

だから一緒に飲む相手を集うのだ。最低でも5人は欲しい。

この国に存在する軍隊のうち自軍を除いた更に五つの軍隊、「ヴォルカニック」「シュパーギン」「ブラックホーク」「シュマイザー」「ミネベア」。これだけの組織が試飲会に参加してくればきっと最高だろう。

スティンガーは徐にワインをグラスの中へ注ぎ、手の中でクルクルとまわしその赤さに見惚れた。

「牙を自ら捨てた憎きフェイファー軍・・・あなたたちをこのワインのように赤く染めてあげましょう。クククククククク・・・」

グラスのワインを一口で飲み干すと、さっそく電話帳を引き試飲会参加のお誘い電話を始めることとした。手始めにヴォルカニック軍へ、酒に合う上質のつまみでも持ってくるよう催促することを忘れずに。

狙いはたったひとつ・・・

「共同戦線による国内フェイファー・ツェリザカ軍の完全撲滅」

このワインばかりは一人では飲みきれないが・・・一番美味しいところだけをいただくつもりでいる。そう・・・ビン底に沈殿したオリなどではなく、もっとうまい部分のみを独り占めしよう。

続

ジン達のリハビリが始まって、早くも半月が過ぎようとしていた。その間部屋の中には誰も入れず、完全に面会謝絶を貫き通している。

であるからして・・・事態が今どんな方向に転がっているのか一行は何も知らずにいた。

「こちらアーウェン、マウザー第15支部応答願います、応答願います！！」

「通信回路断裂、ワルサー支部との通信不可能です！」

「トカレフ、ユニック、ウージー、全てダメです！」

「ステアー中将、フェイファー軍所属の各支部からの通信が全て途絶えました・・・これはもしかして」

「・・・・・・・・積年の報復、それ以外あるまい」

フェイファー軍は今まさに危機に陥っているさなかだった。ここ一週間の間で武装を放棄した自軍の支部から順に次々と交信が途絶えている。それが何を意味するか・・・攻撃を受けているのだ。

フェイファーが生まれ変わって僅か10日足らずでこの体たらく。自分達には贖罪のチャンスが与えられたとばかり考えていたがそれ自体が甘い考え、他から見れば国内最大の脅威が自ら牙と詰めを捨て弱体化しているんだ。そこを攻め落とさないで何とするか？

我々は今まで悪魔の所業を繰り返してきたのに、今更頭を下げたところで誰も許してくれないのは当たり前の話。どうすれば許してくれるか考えてみれば・・・死んで詫びる以外何も方法などない。いや、死んで詫びるのではない・・・最大の苦痛を伴う殺され方をされるしかない。

何もかも甘すぎた・・・都合よく考えすぎた・・・何の対策も考えようとしなかった・・・あのカールグ・スタッフが死んだことに浮かれて宴を催している暇があったらもっと別にやることがあったはずだった。

「中将、如何しましょう？」

「・・・・・・・・交信続行、生き残った支部を一つでも多く見つけてくれ」

「・・・・・・・・了解しました」

「さてお集まりの皆さん、皆さんのおかげで本日未明、トカレフの町のフェイファー軍支部が皆さんのおかげで早期壊滅させることに成功しました」

ここは軍事組織「アバカン」の地下に作られた特別会議室。今この部屋には一つの大きな円卓を囲んで6人の男たちが雁首並べて座っている。アバカン総司令スティンガー、ヴォルカニック総大将「ザウアー」、シュパーギン大隊長「シグマ」、ブラックホーク司令官「グリース」、シュマイザー総帥「クーガー」、ミネベア筆頭「ネイビー」。ここに集っているのは、先日スティンガーが電話して協力を仰いだ各組織のボスたちである。あれから交渉を見事成立させ、悲願であったフェイファー掃討作戦を数日前から決行している次第……作戦は見事に成功している。

交渉のネタとして自らの兵が隠密に仕入れた情報を売ることによって自らが味方であることをアピールしつつ、もしこの作戦が成功した暁には相当したフェイファー領を仲よく6等分することで話が付いた。

そして本日、フェイファー所有の領土のうち約9割の制圧に成功したところだ。

「いよいよ残すは最後の一つと言うわけか」

「力無き組織など、我らヴォルカニックのみで十分よ。他は帰れ」

「言ってくれるじゃねえかオッサンよう、このミネベアの力は必要ないってか？なんなら何時かの決着でもつけるか？」

「言ってくれるじゃないか小僧……臨むところだ」

「勝手にやっている、最終的に我がブラックホークがすべての手柄をいただくのは明白よ」

「聞き捨てならないなグリースさん、おいしい所取りは良くないんでねえのけえ？」

「……まあまあ皆さん、せっかく組んだ同盟なのでですから喧嘩は後にしましょう。ね、ね？」

いくら同盟を組んだところで所詮は敵同士、お互い腹の底から仲良くなりたいただなんて思っちゃいないのは見て分かる通りだ。

全員がそっぽを向いて一時的に喧嘩が止まると、スティンガーは眉を八の字に曲げて溜息をついた。こんなところにいるだけで健康に良くない影響すら出てきてしまいそうな雰囲気だ、早く終わりにしたいのは自分だって同じなのだからさっさと話しを終わりにしてしまおう。

「何はともあれ、最後の作戦は計画通り全員で仲良く殲滅しようじゃありませんか。お互いの未来のために……ね？」

そういうとスティンガーは六つの空のグラスに興味で作ったお手製のワインを注ぎ、各員にそれぞれ配り始めた。配り終わると自分の席には座らず、所定の位置で立ったままワインのそそがれたグラスを片手に前へ突き出す。

「作戦名『流星群（メテオストーム）』。我らの悲願まであと一步、攻撃は皆さんの補給が完了する5日後。それまでの間仲良くしようじゃありませんか・・・全てはシーバルーの明るい未来のために」

そう言うと、全員が目の前に際出されたグラスを手にとって立ち上がり、グラスを円卓の中央へ集結させる。そして契約の証として六つのグラスは同時にキンッ！弾かれ合い、グラスのワインを一斉に飲み干した。

再び空になったグラスを乱暴にテーブルに置くと、スティンガーを一人置いて他の五人はそそくさと部屋を出て行ってしまった。これからが忙しくなるのだ、急いで帰って準備を整えなければならない。

一人取り残されたスティンガーは椅子に腰かけると、自家製ワインの詰まった瓶を払いのけ別の瓶を取り出した。それは有名なメーカーが作った最高級のワインであり、この国でもめったに手に入らない極上物の一本である。それを何の躊躇も無く栓を開けると、あろうことかグラスにも注がずそのまま口をつけ瓶を持ち上げてラッパ飲みを始めた。

口元からポタポタと飲みきれなかった分のワインが零れ落ちるのも気にせず瓶の中身を一気に飲み干すと、スティンガーはとてもいい気分になり空になった瓶を壁に放り投げて粉々に砕いてしまった。

「クッククッククッククッククッククック・・・見ているがいい下郎どもが、最後に笑うのはこの私だ」

一番美味しいものは最後に自分が残さず食べ尽くす・・・スティンガーの中では、全ての駒が自分の計画通りに動いてくれている。全てが自分の手の上で踊っているようにさえ思える。あと一步で、ダメ押しのあれが完成すれば何もかもが完璧になる。そうすればこの国の全てが自分のものになると思うと、こらえきれないほどの喜びと笑いが込み上げてきた。

「アッハッハッハッハッハッハッハ！！アハッアハハッアハハハハハハハハハ！！アハアハアハアハハハハハハハ！！！！」

こちらではあれから軽く一年半が経過した。これまでにジンが繰り返してきたリハビリは以下の通りだ。

- 1：虎眼との実践的格闘術指南
- 2：猫眼合同虎眼の基礎体力、精神力強化
- 3：ジェットによる魔術講義と実践訓練
- 4：ドクターによる魔力の研鑽
- 5：アゲートによる武器を使った実戦訓練
- 6：コルト協力の銃器の分解組み立てによる指先の訓練

これを毎日繰り返しながらフラスコの仮想空間の中で生活してきた。毎日血を見るような特訓（主に虎眼のせいで）のおかげでジンの体は予定よりかなり早く回復し、体と義肢もすっかり定着して完全に自分の手足として動かすことができるようになった。

現在に至っては虎眼、猫眼、アゲート、ジェットを同時に相手にして総合戦闘訓練を実施するにまで訓練内容を実戦向けにしている。

まず虎眼と猫眼を同時に相手にし空拳脚による接近戦闘、ある程度済んだら即座に砂浜に突き刺していた愛刀、閃刀と破刀を掴んでアゲートを加えた3対1での戦闘訓練。そして最後は遠くで見ているドクターのタイミングで放り投げたジンのコート、イージス・ヴェールを身に付けてジェットを交えた格闘、武器、魔術混合の本格的戦闘訓練。この時ジンはあの時身に付けた魔術兵装、「邪道三刀流」を発動し自らも鍛えた音と風の魔術を駆使した完全実戦向け戦闘術の特訓となる。

この日の成果はと言えば、雄叫びで発生させた衝撃波でアゲートを吹き飛ばし、両の刀で猫眼を砂浜へ跪かせ、背中の偽刀でジェットの首を捉えるまでは成功したが・・・最後に虎眼を捕えられずジンは喉を爪を立てて握られてしまった。

「・・・・・・・・ツブハーー！！疲れたあ」

「お粗末様だ、随分腕は上がったが・・・まだまだだな」

「あれだけ動いときながら息も乱さねえとはよう・・・アタシが言うのもなんだが人間じゃねえな虎眼」

「ニヤハハハ、何を言うカジェット？アンタはまだまだ人間ヨ！私たちが異常なだけネ。安心するヨロシ」

「お疲れ様でした皆さん、今日もすごかったですね」

「キシシシシ、水分の補給を忘れるんじゃないよ皆の衆」

「ついでにオレっちの存在も忘れないでー！！帰ってきたよー！」

あれから確かに強くなった。最初は体内の魔力の放出の仕方も分からなかったのに、今となっては自在に魔術を使え集中すれば今のように邪道三刀流も簡単に使えるようになった。歩くのも困

難だったのも虎眼の鬼の特訓とドクターの完璧は補助のおかげだし、刀を使う勘もアゲートのおかげですっかり元に戻った。コルトの銃の組み立てと分解の繰り返しの意味は最初分からなかったが、これのおかげで針に糸を一瞬で通せるくらい器用になれた

特筆すべきは魔力と魔術の応用だろう。ジンはあの時砂の中で泳ぎながら音を発生させてその反射音でグスタフの位置を探っていたことがある。それを話した時ジェットが面白い魔術の使い方を押してくれ、その訓練も積んだ。

音と風の魔術の応用術、それは広範囲の索敵魔術だ。魔術を発動させるために必要な媒介・・・ジンの場合人工物である左腕と二本の刀がそうなのであるが、ジンにしか確認できないような音を発生させることで周辺からの反射音を耳で聞き取り、全身で感じ、視覚以上に閉じた瞼の裏で正確に「観る」ことができるようになった。さらに風の魔術を併用することで周囲の音を「盗聴」することもできる。もう少し訓練が必要だが、1か月も訓練すればきっと目隠しした状態でも日常生活を送ることができるようになるかもしれないとドクターが賞賛していた。

当然ジンの本質である音の魔術もひとつ学んでいる。音の魔術は衝撃による攻撃以上に音の波による精神攻撃を身に付けた。この魔術は簡単に言えば「歌」や「音楽」である。一定の周波数とリズムの音を発生させることにより、人間の感情を高揚させたり鎮めたりすることに成功した。実験台となったアゲートを例に挙げれば感情を高ぶらせる音を発生させると途端に好戦的になり、逆に落ち着かせる音を発生させると一瞬で眠ってしまった。ついでにこの魔術は義手や刀よりも喉から発生させる自身の「声」から発生させた方がより高い効果を生むことができることも学んだ。これからさらに応用が利きそうである。

更に面白い能力も一つ手に入れたが・・・それはまだ内緒にしておこう。

当然のことながらジン以外の一行も皆グスタフとの戦いを反省して成長している。

アゲートは扱いきれいでいなかったあのクソ重たい拳骨ハンマーの使い方を完全にマスターした。今では片手だけであのハンマーをグルングルン振り回すことができるくらい全身の筋力を強化した。

ジェットとドクターは共に基礎魔力値の向上と研磨、魔術を使った戦闘を怠けていたドクターも今ではジェット並ではないにしろ氷の魔術を常時使えるくらいに成長している。

虎眼と猫眼は傷の治りが遅かった分後半からかなりのハイペースで修行を行い、基礎体力から技のキレ、持久力、瞬発力、集中力をさらに強化した。と言っても猫眼の場合以前より毛が生えた程度の集中力しか身につけていないと虎眼は嘆いており、時折二人の意見がかみ合わずしょっちゅう喧嘩をして生傷を増やして帰ってくる。それはまるで兄妹のような光景だった。（それとも姉弟？）

影が薄くて忘れられがちだったコルトは本来一行とは関係のない巻き込まれた形の被害者なのだが、いい機会だと言い射撃のスキルアップに勤しんだ。見学してみたが拳銃で200m先の的をワンホールで撃ち抜いた時は驚愕した。

そんなこんなで、みんな仲良くレベルアップしたところで今日の特訓はこれでおしまいなのである。いつもならこの後食事当番と食料捕獲当番を決めるジャンケンが始まる場所なのだが今日ばかりは事情が変わった。

いい頃合いだし、そろそろ元の時間に帰って見ないかとドクターが切り出したのだ。ここに潜って一年半と少し、元の時間で言えばだいたい20日前後は経過しているだろう。

「そろそろステア一殿に義肢の装着した成果を見せてやりたいと思ってね」

「それには賛成だな」

「ん、異議無し」

「あいよ、そんじゃいっちょ戻るとしますかねっと」

ジェットが杖を砂浜に突き刺してこの空間に来る時と同様にブツブツ呪文を呟きながらパチンッと指を鳴らすと、一行の体が一瞬見えなくなるほど強く発光した。

もう一度目を開けた頃には、一行はあの懐かしき消毒液臭い病室の中に居た。1年半もリゾートで修行をしてきた身から言わせればここに戻ってくると旅行から帰ってきたかのような謎の疲労感と心の安らぎを覚え、思わずベッドの上に腰かけてしまった。

「ふい～、帰ってきたさ～」

「もはや懐かしいくらいだな、ここに来るのも」

「いやはや、本当はたったの20日間だけだったんですけどね」

「いやあ、この硬いベッドに座ったらなんだか眠くなってきたな～。眠みい」

「アタシも同感だな・・・あくびが出てくらあ」

「キシシキシ、寝てても構わないよ。小生は少し出かけてくるがね」

「行ってらっしゃいネ～・・・グースピー」

「コイツもう寝やがったし」

ドクターはドアにぶら下げていた面会謝絶の掛札を外して記憶を頼りに建物内を歩き回り、世話になったステアー中将のいるであろう指令室へ向かって歩いた。

そしてその途中でようやく異変に気が付く。さっきから兵士たちはひっきりなしに走り回り、声をかけても挨拶はするが誰ひとり立ち止まって話もしてくれない。ここの兵士たちは本来の優しい連中に戻れたとは聞いたがこの慌てようはどこか不自然だと解釈し、ドクターは急いで司令室へ向かった。

そして見張りもない司令室のドアをくぐると、中はさらに混乱状態に陥っていた。マイクに向かって何かを呼び掛けている兵士多数、何が起こったのか頭を抱えてその場でしゃがみこむ兵士数名、手元のパネルのキーを叩いている兵士数名、そして突っ立ったまま俯いている見覚えのある横顔一名。あれがステアー中将で間違いない。

「ステアー殿、これは一体何の騒ぎだね？」

「その声は・・・Mr. タンザニヤ殿ではありませんか、今までどこで何をしていたのですか！？面会謝絶の札はあるし、部屋のドアを叩いても返事はないし、鍵がかかって部屋には入れないしで心配したのですぞ！！」

「それに関してはおいおい説明しよう、それよりこの騒ぎは一体なんなんだね？」

「え、いや・・・その・・・ちょっとトラブルが置きましたな、不測の事態故皆どう対処したらよいものか困っている最中なのですよ、アハハハハ」

「不測の事態ねえ、小生も協力しよう。詳しく聞かせてくれ」

半月以上勝手に病室を留守にして心配をかけてしまった様子なのだ。ならば少しでも力になって

やろうとドクターは意気込み気合の表れとして袖をまくった。

しかし・・・

「いけませんッ！！！！」

司令室中に響き渡るようなステアーの怒号が、ドクターの両耳をマヒさせてしまった。明らかに余裕をなくしているステアーは額から汗を流し、息を乱しながらドクターの肩を掴んで説明した。

「よいですかMr. タンザニヤ、これは我が軍の・・・ひいては我が国の問題。部外者であるあなたには何の関係もありません。ましてやこれ以上あなたたちに甘えるわけにはいかないのです、何も聞かずにこの国から出て行ってください。お願いします」

言うや否や、ドクターの反論も言わせぬままステアーは軍帽を脱いで頭を深く下げてしまった。いったい何が起きているのかはわからないが、この行動からかなり危険なことが起きていることだけは十分に理解できた。だからこそ、逆に何が起こったのか正確に知るまで引き下がることができなくなってしまった。

「ステアー殿・・・」

「聞き捨てならねえなあ、おっさんよう！」

司令室に突如、聞きなれた声が乱入してきた。二人が同時に振り向くと新しいタバコを啜えたジンがそこに立っていた。機嫌悪そうに、腰を曲げているステアーを見下しながら煙を吐き出した。

「なんだかやかましいと思って来てみりゃ何て様だよおっさん。おまけに何だ？人のこと最初は英雄呼ばわりしといて今更部外者扱いとは気に入らねえなあ」

「Mr. ジェイド・・・これには訳が」

「おうおう、人のこと部外者にしてこの国から出てけなんて聞かされて、うまく言いくるめられるイカした言い訳あんなら聞いてやるから言えやコラ！！」

ジンはさっそく機械の左腕でステアーの胸ぐらを掴みあげて揺さぶると、本人は手にした軍帽を取り落としてジンから目を背けてしまった。頭の中で、急いでジンの言うイカした言い訳を考えているのだが全く妙案が浮かんでこず、両目が泳いで決してジンをまっすぐ見ることができない。

何か重大なことをこいつは隠している、そしてそれを何が何でも言いたくないのは明々白々、こ

うなったら何としてでもゲロさせてやると意気込みジンは左腕に魔力を集約し始めた。  
その直後・・・

「中将、向こうから無条件降伏せよとの通信が入りましたが、如何でしょうか？」

「バカ、今ここで言うな！！！」

「・・・・・・・・無条件降伏？」

やっこさん完全に予想していない形で重大なことを露呈させてしまった様子だった。無条件降伏、たったその一言を聞いただけで何かを察したジンはステアーを離し、彼はそのまま膝をついて倒れ、四つん這いになる形で床に崩れ落ちた。

「・・・・・・・・ステアー殿、無条件降伏せよとはどういう意味だい？」

「言い逃れは・・・・・・・・できねえよな？」

「・・・・・・・・・・・・モニターに全て移してくれ」

「え・・・・・・・・よろしいのですか？」

「もう遅いんだ、構わない」

「りょ・・・・・・・・了解」

一人の兵士が目の前のコンソールパネルを叩き、今何が起こっているのかを鏡面の大型モニターに分割して映し出した。

その真実を目の当たりにした二人は、目玉が飛び出すほどの驚愕を覚えた。

北よりヴォルカニック軍率いる武装起動歩兵軍団、総兵力6500

東よりミネベア軍率いる斬撃強襲突撃部隊、総兵力7000

南よりシュマイザー軍率いる武装戦車車両+航空爆撃装甲ヘリ、総兵力800

西よりシュパーギン軍率いる竜騎兵軍隊（ドラグナー）、総兵力3000

そして空を覆い尽くすのはブラックホーク軍率いる翼竜騎兵軍（ドラグーン）、総兵力2500

総戦力、占めて19800

一体何が起きているのか一瞬で理解できてしまった。

おかげでこちらは声も出ない始末だ、いったいこの始末どうしてくれよう？

敵に・・・しかもこれだけの数を相手にこのアーウェンは完全に包囲されてしまっているのだ、今のステアーのように絶望したってしょうがない。

「お分かりいただけたか・・・今の我々の状況」

「ああ・・・これはなんとも言えないねえ」

「ぐうの音も出ねえってやつか・・・最っ強にヤバイなこいつぁ」

「前後左右上空、全ての逃げ道を断たれました。こちらの兵力は500未満、武装は全て放棄して今の我々は丸腰に等しい状態です・・・とても立ち向かえません」

「え、いやでも、フェイファーはもともと大陸の半分を所有してたんだろ？だったら他の場所にいる連中に連絡付けて」

「この10日間交信を試みましたが、このアーウェンを除くすべての支部からの通信が途絶え、誰一人として交信に出てくれる者はいませんでした」

「ちょっと待ちたまえ、それってもしかして・・・」

「我々以外の全支部が・・・壊滅しました」

現状は予想をはるか斜め下に向かって急降下してしまっていたらしい。自分たちがいない間にこの軍は今とてつもなく悲惨な目に遭っていたようだ。かける言葉が見つからない。

つまり今のアーウェンは陸の孤島と化しており、今まさに侵略の対象と相成っているというわけだ。笑えない冗談である。

「・・・ひょっとして、オレ達のせいなのか？オレ達があのかつ野郎を殺したから、こんなことに？」

「貴方方のせいではありません。遅かれ早かれ、いずれはこうなるものだと覚悟していましたが・・・時期が悪かっただけです」

ステアーはこんなことになった原因を必死に自分たちのせいにしようとしているが、ジンの耳には明らかにグスタフを殺してしまった自分たちのせいだとしか聞こえず、両腕でも支えきれないような膨大な重さの罪悪感に飲み込まれそうになってしまった。

国の歴史を変えて英雄？勇者？とんでもない。ジンのやったことは、この組織に災厄をもたらす悪魔の所業でしかなかったのかもしれない・・・否、まさにその通りである。

・・・となれば、だ。やることは決まった。

「悪いとしたなおっさん、落とし前は付けるから安心しろ」

「・・・はい？」

「・・・メガネ君、まさかとは思いますが小生嫌～な予感がするのだがね？気のせいかい？」

「さあな・・・じゃ答え合わせしようや、向こうでな」

そういうとジンは飄々としながらドクターを引き連れ司令室から出て行った。これから一体内をしようとするのか何もわからずポカンとしているステアーを置き去りにして。

ジン達の病室にて

「「ええええええええええ！！！！この街が完全包囲！！！！??」」

「どうもそうらしい、元はと言えば全部オレ達のせいだ」

「どうりでさきからドタバタ煩くて眠れななかつたヨ・・・ファ～」

「貴様十分寝てたろ！」

今自分たちの置かれている現状を部屋に残っていた連中にザラッと話し終わると、アゲートとコルトが驚愕した。そしてこの原因がダイヤモンドを手に入れるためにグスタフを殺し、この国の微妙な力関係の均衡を破壊してしまった自分たちにあることを追加で話すと、全員がとんでもない罪悪感に押しつぶされて部屋の中が静まり返ってしまった。

「・・・当然、僕も関係者ですよな？」

「だろうな」

「約2万の大軍勢・・・死んだろこの街（半笑）」

「間違いないな」

「このままでいたらオレっち達って・・・」

「殺されるな、間違いない」

「今の小生達の会話って」

「不毛だな、間違いない・・・」

先ほどから同じような会話ばかり繰り返し、実にもならなきゃ葉もならない不毛な言葉のキャッチボールに疲れた一行は、また静かになってしまった。

ただし、この一人を除いて。

「黙ってたってしょうがねえや、さっさと行くぞ」

「へ？行くって、どこへですか？」

「ツレションか？」

「アホ、ここ取り囲んでいい気になってる連中一人残らず潰しに行くんだよ」

ドクターの予想は的中し、一人で頭を抱えて愕然としてしまった。メガネ君ならきっとこういっただろうと予想していたが、ここまではっきり思った通りに言ってくれると逆に面白くなってしまいう自分が嫌だった。今日この場に限り、いつのも奇笑は控えておくこととしよう。

本来ならここで全員で「えー！」の一つでも言いたいところなのだが、今はそんなことを言っていられる程の気分ではない。責任感を感じて落ち込んでいるから？

全く違う。

「仕方がないさ、オレっち達の責任だもんね」

「そうですね、いつまでクヨクヨしたって後の祭りですし」

「鍛錬明けの実戦にはちょうど良さそうだ」

「面倒くせえけど、しゃーねーか」

「手足の稼働テストにもちょうどいいしな」

「んん・・・ドクターはどうする？」

「ハァ・・・行かないわけ無いだろう？」

「だよネ！なら私も行くネ！」

落ち込むどころか全員やる気満々だった。

傷は回復して英気も養い、力も蓄え、レベルも上がり、コンディションはオールグリーン。

世話になったファイアーを助ける目的半分、身に付けた力がどこまで通用するか暴れて確かめたい気持ち半分で約2万の軍勢相手に・・・ケンカを吹っ掛けるつもりだった。いや逆だ、吹っかけられた喧嘩を買いに行くのだ。

話し合いの結果ジンは東のシュパーギンを担当し、ヴォルカニックをコルトが、シュマイザーを虎眼と猫眼が二人で担当し、ミネベアはドクターとアゲート、空のブラックホークは自動的にジェットが担当することとなった。

「なあジン、今度のは随分とデカイ喧嘩になりそうだな？」

「そうだな、久々に腕が鳴るってもんよ」

「ところで、何か作戦でもあるのかいメガネ君？」

「作戦ねえ・・・そいじゃ命名して、作戦名『見敵必殺（サーチアンドデストロイ）』だ」

「ニヤハハハハハ、言うと思ったヨ」

「その方がよっぽどオレっち達らしいさ！」

「へへへ、違えねえ」

「・・・野郎ども、気合入れてかかるぞ！！」

「気張るっさあ！！」

「上等だ！！」

「キ～ッシッシッシッシッシ！！」

「本気を出すとするか！」

「ドクターの為に頑張るヨ！！」

「出し惜しみはしません！！」

続

## 作者の一言

---

今年もインフルにかかってしまい、回復したのちに一気に書き上げた  
おいらの作品史上最大の個人対超勢のドデカイ戦という名の喧嘩が始まります

読んでくれている皆さん、どうぞ期待  
次のUPまで、しばしバイナラ

## おまけ

---

### ジンの刀とコートについて補足

ジンの閃刀と破刀は入院した時にはすでに回収済み、バカルディの世界に入る際虎眼とアゲートが持ってきた。ほかのメンバーの武器も同様にそれぞれ後日持込み各々の特訓に使用

イーリス・ヴェールはジンが魔力をコントロールできるようになった際いつも来ているトレンチコートに姿を変えて、いざという時には自在に偽刀へ姿を変え邪道三刀流を発動できる。ついでにドクターが回復祝いにコートにおまけを加え、最近凝っていると言って翼竜（バハムート）の刺繍を縫い付けてくれた

ジンの魔力で作られたこれら三点は、魔力で作られたにもかかわらず常時実体化しており放っておいても自然消滅することはない

刀にはそれぞれセーフティがかけられており、ジン以外の使用は不可能となっている

閃刀はジン以外鞘から抜くことができず、破刀はジン以外が持とうとすると数百キロから数十トンまで刀身全体が重くなり虎眼の全力をもってしても持ち上げることがせいぜい。ただし抜身の状態で手渡しをすることは可能、重みもなく普通の刀として両方とも他者でも使用可能